

均は 20.74℃であった。オニオコゼ 1 歳魚の飼料転換効率にはこの期間中に明瞭な差は見られなかった。飼料効率には飼育密度による差が見られ、一水槽あたり 10 尾がもっとも高く、それより密度が低くても高くても低くなった。オニオコゼ 2 歳魚の飼料転換効率は飼育水温の低下とともに減少し、水温約 20℃以下になると飼料転換効率は負となった。飼育密度による飼料効率の差異は認められなかった。

飼育条件下におけるトラフグ仔稚魚の相対成長

○ 鈴木久英・脇山嘉之・小野司・伏見浩(福山大生命工)

【目的】　トラフグの未成魚の養成試験に関する報告はあるものの、仔稚魚期の相対成長についての報告はない。本研究ではトラフグの相対成長について検討し今後の飼育管理に反映させるため発育段階の区分を行った。

【方法】　ホルモン処理による産卵誘発により得られた卵から得たふ化仔魚を 2002 年 5 月 10 日～7 月 14 日の 65 日間飼育した。L 型ワムシ、アルテミア、冷凍コペポダおよび配合飼料を給餌した。孵化直後および孵化後 2 日齢から 30 日齢まで 2 日おき、35 日齢から 65 日齢まで 5 日毎にサンプリングを行った。マイクロメーターを用いて全長、標準体長、頭長、躯幹長および尾部長を 0.01mm まで測定した。

【結果】　全長に対する頭部、躯幹部、尾部の相対成長式は頭部では全長 6.33mm(22 日齢)と 19.38mm(50 日齢)、躯幹部では全長 8.91mm(30 日齢)と 21.32mm(50 日齢)、尾部では全長 6.84mm(24 日齢)と 10.61mm(35 日齢)に屈曲点がみられた。これらの屈曲点を組み合わせて発育の内容が同じ期間を判別し、発育段階を 5 段階に区分した。全長に対する頭部、躯幹部、尾部の相対成長の優先順位は頭部、躯幹部、尾部の順であった、これは他魚種の報告にある優先順位摂餌関連部位(頭部)、遊泳関連部位(尾部)、消化関連部位(躯幹部)の順と異なっていた。これは 6 日齢時に尾部長の平均が他の部位よりも大きく孵化直後からある程度の遊泳能力を有しているためと考えられた。

オニオコゼ種苗生産における卵収容密度の検討